

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認誌第六二七号  
平成二十四年一月一日発行(第四百十五卷第一号)

# ホトトギス

一月号



## 俳句随想 〔三百五十五〕

汀子

北海道のKさんは八十九歳。今年、長年看病をされた最愛の奥様を亡くされた。それはその様な体験をされた方ならばきつと分かるであろうが、さぞ淋しい思いをされているのではないかと心にかかつていた。

最近、天地有情の投句用紙の裏の通信欄でKさんの消息を知った。「上を向いたらきりが無い、下を見てもきりが無い。横を向いたらホトトギスが居た。このホトトギスこそ私の第二の女房として苦楽を共にして一〇〇歳までがんばるよ……」とあった。俳句を生涯の伴侶としてお元気で過ごされているのを私は嬉しく思う。悲しみも喜びも共に分かつ伴侶を是非ホトトギスに見つけて頂きたい。

俳句はきつと私たちの生涯の伴侶となってくれるであろう。私も四十九歳で夫を亡くして以来、俳句が私を助けてくれた。これからもきつと私の力になつてくれるであろう。

今年、東日本大震災という未曾有の災害が起こり、今尚その災害の二次的災害である原発が収束してないし、先が見えない。

美しい自然、優しい自然ばかりではない。厳しい自然もしっかり見つめて俳句を作つて行かなければならないのである。

旬日記

汀子

平成二十三年一月三日 三が日会

冬牡丹その香に奢りなかりけり  
主婦といふ枷にはまりて三ヶ日  
水洩を吸りて一句仕上りぬ  
第二句会

琴線の解けたるより初句会  
片づけてなほ片づかぬ去年今年  
星を見るための寒さと思ひけり  
一月五日 ロイヤル俳壇

崩したくなき髪型を梳き初す  
スケートに興じたる日々通かにす  
その所在紛れなかりし初日かな  
年賀状より邂逅のはじまりぬ  
この寒さ暁の明星輝かす

一月八日 芦屋ホトギス会  
初仕事終へたる歸路の富士の山  
初便らしくあらあらかしこかな  
一月九日 下萌句会

祝ぎ心寒さ忘れてをりしこと  
忽ち心寒さの暮し去年今年  
冬薔薇に祝意東ねてゆきにけり  
一月十一日 大阪倶楽部

見舞はれて見舞ひて寒の内なりし  
話題またそこへ戻りぬ寒見舞  
春近きことを心に励むほど  
初旅の趣向といふも同じほど  
失せものは鍵と告げられ悴みぬ

初旅といふ楽しみは別に組む  
一月十一日 綿業倶楽部

偲ぶ会 四温の旅となりぬべし  
三寒の家 居 四温の旅とこそ  
双六の 早々上り 所在なく  
三寒のつづきのやうな日となりぬ  
一月十三日 清交社

案外に忘れてをらぬかるたかな  
数の子の歯応へにある祝ぎの膳  
とはいへど動き出したる三ヶ日  
初 富士 の 全 き 姿 上 京 日  
風通り抜けし如くに三ヶ日  
会食の済めばこれより初句会

切符買ふより初旅でありしこと  
一月十四日 工業倶楽部  
歌留多会 十八番揃へて身ほとりに  
旅支度ぬかりなかりし寒の内  
三ヶ日済みていつもの一人かな  
もの忘れしてもかるたは別なりし

一月十五日 年尾先生偲ぶ会  
しなやかに 靡く 山肌 枯 芒  
靡くもの北風に従ひをりしかな  
木々 蔵しき けれど 命 春 隣  
皆寒き顔ほころばせ 戻る パス

一月十六日 偲ぶ会  
寒の内とは心得し旅なれど  
荒るるてふ雲の形も寒のもの  
一月十八日 有恒俳句会  
よく見れば水柱かたまりぬし 狭庭  
凍星となり 金星の 孤高かな

吹雪貫きて延着なりしこと  
寒月の満ちゆく旅の歸路となる  
臘梅の香の風道の出来上る  
一月十八日 無名会

悴みて切符の在処確かむる  
ともかくも雪の消息伝へたく  
関ヶ原どころか雪に阻まれる  
車窓には雪一枚となりけり  
悴んでをられぬ旅でありしかな  
歸路にして雪の遅延といふことも  
吹雪ゆ 糸立 往生 となる 旅路

一月十九日 夏潮句会  
灰神楽立ててどんだの終りけり  
寒月の山の端にあり暁けそむる  
何といふことなく大年越えしこと  
お汁粉の配られしより初句会  
焚火せし句ひを纏ひをりし席  
焚火して風の方 向 定 ま り ぬ

一月二十七日 きざらぎ会  
風花の消えて消えざる大地かな  
風花と気づかぬ人も居りにけり  
太陽を隠す雲生れ 風花す  
星消えて星消えて今初日の出  
風花の止めばはじまる 衆のあり

一月二十八日 時雨句会  
狭き部 屋 模 様 替 して 春 隣  
双六の折目伸ばして賽を振る  
双六に足止めといふ難所あり  
滞在の五日に及ぶ春隣  
双六や又人生のあともどり  
春近しとも遠しともはや八十路

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十三年一月三日 三日夜

句碑の文字より立ち上る淑気かな  
初電車歩き疲れし背中かな  
芦屋川沖を横切り漁始

一月六日 焦心会

初景色とは六甲の白さにも  
水音を冷たくしたる流れかな  
御降を白く彩る六甲の風  
宝船めく輝きの水尾となる  
摂津より雪の便りがあらうとは  
礼者てふ猫撫で声でありにけり

一月八日 芦屋ホトギス会

竜の玉見付けて欲しいから光る  
初便てふ電波飛ぶ電波とぶ  
先づ禁酒解くより仕事始かな

一月九日 野分会芦屋例会

買初や百万円の福袋  
一本の道一步より淑気満つ  
百人に百の淑気でありにけり

一月十二日 「俳句研究」春の五句

点描画めく六甲の斑雪かな  
日の本に日差集めて春祭  
春障子忌日控へてゐる寺苑  
春陰や誰彼となく偲ぶ歩に  
桜蕊覚悟してゐるやうに降る

一月十三日 土筆会

今日は家事夫の役なり肝葉  
山の神迎へ左義長始まり  
白は日を紅は風恋ふ寒牡丹  
飾焚く神戸市私立小学校

一月十五、十六日 高濱年尾を偲ぶ初句会

著ぶくれて名札の所在なく揺るる  
文学碑文字の飛び出しさうな寒  
冬うらら乗物嫌ふバスガイド  
湯ざめし近付ても見たき星空であり  
光年を近付けてゐる寒の星  
一月十六、十七日 年寿会

重さうに空引き裂いて鴨飛べり  
鴨の陣とは餌投げるまでのこと  
日脚伸ぶ町春草の筆跡に  
臘梅の日表といふ騒ぎかな  
待春の波垂米利加を近付けて  
稜線を統べ寒天の下りてくる  
春隣やつと下田に來た気分

一月十八日 草木瓜会

寒月に黒船白く照らさるる  
寒月を窓辺に置きて偲ぶ人  
又一人初夢でのみ会へる人

一月十九日 かずさホトギス五百号記念句会

三寒を発ちて四温の祝ぎの座へ  
水仙の凛と祝ぎの香放ちけり  
水を恋ふ水仙の香でありにけり  
祝ぎの炬を守る佳人でありにけり  
炬火明り三百年を引き寄せて

一月二十日 登高会

開国の日を遠ざけて石尊生ふ  
初景色とは万物を白くして  
ビル街に居て初景色とは孤独  
寒雀 芝生 養生中の庭

あをさ汁人は海から生れしてふ  
一月二十三日 野分会東京例会  
買初に君の性格見てしまふ  
淑気満つ中にも偲ぶ人のこと  
西の賀に東の祝ぎに淑気満つ

一月二十四日 朝日カルチャー若草句会

吾の心まで白くする雪女郎  
蓬萊を掛けて玄関改る  
雪女博多美人でありにけり  
護摩爆ぜて初不動明け初むる  
一月二十五日 若水句会

風上といふ探梅の歩幅かな  
屋敷神淑気放ちてをりにけり  
探梅行やつと待ち人來りけり  
高濱家池内家の小殿原  
ケロリンの文字鮮やかに初湯かな  
丸の内高層ビルを縫うて北風  
朝の気と層い淑気満つ厨かな  
北風に靈峰いよよくつきりと  
北風にスカイツリーの磨かれて

一月二十六日 目黒学園句会

水鳥の数てふ沼の機嫌かな  
石ころのやうに鴨転がつてをり  
沼を見る碧梧桐忌を二日後に

一月二十日 遇会

面の皮冷たく引つ叩く千種  
壁を塗るやうに寒紅引く女  
祖母逝きて御旧となりしコートかな

一月二十日 梅花祭出句

紅ほつと目に触れてより梅探る  
一月三十日 カトリック新聞選者吟  
師走人吸ひ込まれゆくチャペルかな

# 雑詠

## 廣太郎 選

七月の大樹はげしく樹皮零す  
甲斐信濃入道雲の睨み合ふ  
眼を開きくれし一書ぞ虫干す  
天空に月泳がせて雲の波  
渡り鳥光の粒となる高度  
返り花風の死角に咲く狭庭  
熱海海上花火に船や舟も出る  
突堤の闇に花火師駆け回る  
山荘の真正面に花火咲く  
人の世を離れ流灯消えにけり  
鷺草の魂飛び去りて果てにけり  
故郷を去る秋深き一夜かな  
裸身ひるがへして滝の落ちにけり  
滝落ちて光陰とどむすべもなし  
滝壺をめぐけてわれもわれもと水  
鶏頭の色に部厚さありにけり  
秋のぼら色に隙間の多かりし  
とんぼうの風乗り継いでをりにけり

相模原 木村享史  
同 同  
同 同  
金沢 藤浦昭代  
同 同  
熱海 嶋田一步  
同 同  
福山 竹下陶子  
同 同  
熊本 岩岡中正  
同 同  
八尾 山下美典  
同 同

朝霧を脱ぎて淡海となりにけり  
一本の曼珠沙華より仏道  
一切の音断ち露の籠堂  
清流に大きく歪む跣足かな  
蓮咲いて夜明けの色をこぼしけり  
捨て舟の傾ぎて零す秋夕焼  
川下り京の残暑に着きにけり  
ビル街のどの角曲がりても残暑  
広き葉に影こまごまと花カンナ  
東京も世田谷あたり虫の秋  
秋祭ほんのわづかの寄附をして  
宮相撲見る一本の木に倚りて  
雲の峰甲子園まであと二勝  
キャプテンが打たねばならぬ酷暑  
獲物追ふ目をせしシヨート汗光る  
整ふといふは散らばる鯛雲  
太陽に向いて表となる照葉  
平面を高低に鳴き虫の原  
長き夜を旅にしあれば寝惜しみて  
灯下親しむゆつくりとゆつたりと  
秋灯下靖もいいが周平も  
京はなれ来し新秋の旅路かな  
大雨に停車長引く露の旅  
濡れそぼつ心に御釜描く霧

奈良 古賀しぐれ  
同 同  
同 同  
渋川 木暮陶句郎  
同 同  
神戸 山田佳乃  
同 同  
東京 今井千鶴子  
同 同  
神戸 藤井啓子  
同 同  
香川 湯川雅  
同 同  
神戸 山西商平  
同 同  
京都 安原葉  
同 同

## 雑詠句評（十二月号より）

（一步）

クラシックのコンサートでのマナーとして、演奏中観客は決して音をたててはいけない。咳やくしゃみも憚られ、プログラムを捲る音さえ目立つ、というのだ。そんな「雑音」であるが、こちらは「香水」である。確かにきつい香りは鑑賞の妨げになるだろう。実感が伝わってくる。（廣太郎）

### 日本人四人の街の花見かな 瑞安 小川龍雄

作者が中国へと海外赴任をされて幾年が経つであろうか。もうそろそろ日本の暮しに戻りたいのではと拝察する。

彼の住む街には日本人が四人なのでしょう。日本人四人とはつきり詠んで、外国暮しを伝えている。

春が来るとやっばり花見を楽しみたい日本人であるから、誰からとなく誘い合い、あるいは現地の人も混ざり、花の下で日本に思いを馳せては、あれこれ懐かしがっているのである。しみじみとした情が一句に流れる。素敵な奥様の待つ日本にお帰りになられる日も近いかと思う。（雅）

中国に単身赴任されている作者であるが、日本人が殆ど居ない街だと伺った。そんな中「花見」の季節、この街には果たして日本のような桜の花はあったのだろうか。それとも遠出をされたのかも知れないが、四人それぞれの日本に対する郷愁が伝わってきた、日本人ならではの美意識が感じられる。（廣太郎）

（以下略）

### 香水といふ雑音やコンサート 神戸 長山あや

一步・雅 ・比奈夫  
しげ人・仁 義・暮潮  
純也・佳 乃・くに彦  
昭代・廣太郎

此の句で詠われているコンサートとは音楽のそれも更に大きな正装してでも行きたくなるような管弦楽のコンサートでのことであろう。心地よいオーケストラの曲が流れて耳を澄まして聞いている夢中でいる作者にふと香水の匂いがどこからともなく突とさまさまの香として作者の嗅覚に来てしまった。それを作者はオーケストラの美しい音の中に紛れ込んだ雑音と感じとったのである。不快を感じさせる音と聞いたのである。気持よくさせるはずの香水の香がコンサートの中にあつては嗅覚ではなくて音としてそれも雑音として聞えてしまったというのは此の作者の感性なのであろう。どちらにしても香水の香という嗅覚を聴覚である雑音と感じたことが面白い。すぐれた感性であるといえよう。

# 天地有情

# 江戸選

湖中句碑てふ一本の月の影 奈良 古賀しぐれ  
竹生島よりはるばると月の波 同  
近付けば毛虫震へてをりしこと 東京 稲畑廣太郎  
風蘭や視力回復したる目に 同  
窓開くけさ新秋の東山 京都 安原 葉  
独り居に馴れし任地の夜の秋 同  
鎮魂の海山空よ風は秋 仙台 赤川誓城  
駒草に逢へしを潮に帰らなん 同  
寝たきりで一族束ね生身魂 東京 内藤呈念  
正体を塵と知つても流星雨 同  
ことさらに月の芒を高く挿す 同 今井千鶴子  
星空を残し傾く今日の月 同  
丈低き芒も風の大観峰 樞原 稲岡 長  
阿蘇山のこの一角は蕎麦の秋 同  
月光といふみほとけのみそなはず 明石 中杉隆世  
夏萩の株は一つでありにけり 同  
日記果つ果ててはならぬ史秘め 金沢 藤浦昭代  
星美し賀春の光惜みなく 同

昨夜の雨より新秋となりしかな 東京 河野美奇  
新しき日々新しき白木樅 同  
箱庭にハワイの小石与論の貝 神戸 後藤比奈夫  
一つ葉として諍もなく育つ 同  
秋の灯や言霊しのび寄る一書 同 長山あや  
刈萱で染めし絹糸月のいろ 同  
迫りくる眉山の緑梅雨明けし 徳島 上崎暮潮  
開きたる戸口塞ぎし火花かな 同  
すこし手を入れて涼しくしてありぬ 神戸 後藤立夫  
水澄んで水の見えなくなりけり 同  
汝と吾のかはらぬくらし夜の秋 箕面 井上浩一郎  
秋の灯のひとつを指して帰るかな 同  
諸星を見し目の卓に吾亦紅 西宮 本郷桂子  
吐息また揺らしてをりし月の供華 同  
今日の向き自在に十の鉄砲百合 熱海 嶋田一步  
一匹は離れ七匹鯉の秋 同  
蝶翔ちしところを見れば草の花 同 嶋田摩耶子  
鳥のごと急降下して山の蝶 同

# 天地有情句評

## 汀子

東日本大震災の鎮魂の祈り。

正体を塵と知つても流星雨 東京 内藤呈念

宇宙の神秘。

湖中句碑てふ一本の月の影 奈良 古賀しづれ

ことさらに月の芒を高く挿す 東京 今井千鶴子

琵琶湖の湖中句碑に月影が映る詩情。

月の供華への作者の思い。

風蘭や視力回復したる目に 東京 稲畑廣太郎

丈低き芒も風の大観峰 樺原 稲岡 長

風蘭の細かい花の仔細を見得た感動。

風に耐えて丈の低い芒原の情景。

独り居に馴れし任地の夜の秋 京都 安原 葉

夏萩の株は一つでありにけり 明石 中杉隆世

要職の長い滞在の生活にも季節の推移を感じて。

一つの株とは思えない夏萩の枝垂れるさま。

鎮魂の海山空よ風は秋 仙台 赤川誓城

(以下略)